解説・報告

現場から学んだ14年間
―公務員(県)獣医師として経験した職場について―

白羽知子[†]（愛知県農業総合試験場畜産研究部主任研究員）

1 はじめに

農場どないすんねん研究会（以下「NDK」という.）のワークショップにて，日本獣医師会より「女性獣医師による連載を企画しているので執筆をお願いしたい」と原稿依頼があった．活躍されている女性獣医師は多数おられるので，自分はふさわしくなかろうとその場はお断りをした．しかし，愛知県の農林水産部に所属した私の14年間の経験を簡潔に紹介することが，自分に与えられた役割だとのちに気づき，引き受けることとした．

2 初任地，家畜保健衛生所に勤務して

県に就職して，農林水産部に所属する獣医師が最も多く配属されるのは，家畜保健衛生所（以下「家保」という.）であろう．私も御多分に漏れずに家保勤務となった．

私が採用された平成10年当時，家保で活躍している女性獣医師の先輩は既におられたが，まだまだ大多数が男性獣医師の職場であった．しかし，先輩女性獣医師の仕事振りや人柄が生産者に認められていたおかげで，スムーズに地域に受け入れてもらえた．

牛では結核病やブルセラ病，豚では豚コレラやオーエスキー病，鶏ではニューカッスル病といった伝染病検査，病気が発生した時の病性鑑定，そのほか伝染病の発生予防や畜産農家の衛生指導，牛の受精卵移植など技術普及的な業務も行った．

大学時代，研究室で豚を飼っていたので，ある程度家畜に慣れている，畜産のことも知っているつもりでいたが，実際は違っていた．知らないことばかりで，戸惑う毎日であった．家保では採血業務が多い．乳牛の採血は，尾根部からの採血が大半であったが，乳牛の育成牧場や和牛の預託牧場では頸静脈から採血をしていた．ロープで保定されているが，針を刺そうとすると動く牛に「お願いだからじっとしていて」と，念じることがしばしばあった．確実に採血を行えるようになるための，「習うより，慣れろ」を徹底した期間であった．肉用名古屋コーチンの雄鶏を初めて採血した時は，大きく力が強くて一人で保定ができず，同僚に押さえてもらっても採血に手間取り，結局，同僚に代わってもらったことなど，今でも覚えている．

3 初めて体験した「風味異常とアルコール不安定乳」

家保の仕事にある程度慣れてくると，自分がどのような仕事をしたいか，どのような専門を持ちたいかと考えるようになる．「できれば牛の担当をしたい」と考えている頃に，ある酪農家から「風味異常乳とアルコール不安定乳」の相談が入った．その酪農家は，「今日搾った乳は出荷できるかどうか」と，検査結果の電話をおびえながら待つ毎日に，疲弊していた．この時に，どのような風味の異常であるかを知るために乳業メーカーの検査室を訪れ，実際に自分達も官能試験をさせてもらった．この時私は，同じ乳牛の乳でも，個体によって，あるいは生産者によって，こんなに味や風味が違うものなのかと衝撃を受けた．また，私はこの事例から，生産物を出荷できないことがいかに生産者を追い詰めるか，ということを知った．そして，病気や異常を起こさない，予防のための生産システムの確立とその大切さを考えるようになった．

4 畜産総合センターで乳牛の担当を

「実際に生産に携わりたい，牛を飼ってみたい」との思いが強くなる中，就職して5年目に希望が叶い，畜産総合センター（以下「センター」という.）で，酪農担当となった．酪農担当は，能力の高い乳牛を繁殖し，育成した，優良種畜を県内の酪農家へ供給することが業務である．乳牛を産ませ，育て，乳を搾って泌乳成績を出す．当番制で朝夕の搾乳作業があり，一方でサイレージ用のデントコーンを作るなど飼料作業もある，という職

† 連絡責任者：白羽知子（愛知県農業総合試験場畜産研究部養牛研究室）
〒480-1193 長久手市岩作三ケ峯1-1 ☎0561-62-0085(内線561) FAX 0561-63-7855

場であった．

家畜を実際に飼っている現場は，大変なことも多い．忙しい時や休みの時程，牛の不調や機械のトラブルが起こることが多かった．正月休みにスキーへ行った時，ゲレンデのリフト上で，「搾乳の機械が動かない！　搾乳できない！」と，職場から電話を受けたこともあった．家畜を飼う現場では，仕事は休みなく稼働していることを実感した．大変ではあるが，実際の生産現場を知ることは貴重である．牛は，手をかけた分確実に牛自体の調子が良くなり，生産につながっていくため，やりがいも多く感じた．餌を食べた後にゆったりと横臥して反芻する牛の姿を見ると，牛の体調が良いことがわかり，とても嬉しく，私を幸せな気持ちにした．

5　再び2箇所の家保へ ―2回の高病原性鳥インフルエンザ発生と国内口蹄疫の発生を経験して

センターで2年間，酪農の生産現場を経験した後に，再び家保へ異動となった．

3番目の職場は，渥美半島を含む東三河地域を管轄する家保で，畜産が盛んで農家戸数・家畜数とも多い地域である．日々のルーチンワークに加え，突発的に入ってくる病性鑑定も多かった．センターで実際に牛を飼った経験から，「何が原因か」について，複数の視点を持ち，「何をすればよいか」「すぐにできることは何か」を考えるようになった．しかし，まだまだ分からないことが多く，日々勉強しなければと思い知らされる時期であった．この期間に，分からないことに向きあうしぶとさが少し養われた．

4番目の職場は，入庁10年目にして初任時に配属された家保へ異動となった．

採血作業中に，家畜の健康度が窺えるようになってきた．健康な家畜は，血管がわかりやすく，血流が十分あるために，採血が楽で早く済む．検査で農場に入る際，家畜の状態を見て，生産者と世間話をしつつ聞き取り調査を行い，農場全体の現状を確認する，というような，先輩獣医師らがやっていたパターンが，ある程度身についてきた．

ここまで，大きな伝染病の発生を経験しないままであったが，一転して，平成21年にはウズラ，23年には鶏と，県内で高病原性鳥インフルエンザの発生があった．更に，その間の平成22年4月には宮崎県において口蹄疫の発生があった．防疫活動に獣医師が必要なことから，私も宮崎県に派遣となり，全国から集まった獣医師とともに現場作業に従事した．伝染病の猛威を実感した怒涛の期間であった．

非常時・緊急時には，平常時以上にイレギュラーなことが起こり得る．それまでの経験では判断しかねる状況が起きた時に，信頼できる上司や先輩，同僚とともに，組織・チームの力で対応した．この時期に家畜衛生，防疫業務への取り組みのあり方等，学んだことは多い．

6　農業総合試験場で肉牛担当

テーマを持って現場につながる技術の試験研究に取り組みたいとの思いから，農業総合試験場を希望して，畜産研究部養牛研究室の肉牛担当となった．

ここで驚いたのは，肉牛と乳牛とでは，同じ牛でも全く別の生き物と感じたことだ．管理から生産まで，いかにコントロールするか，という考え方の乳牛に対し，放牧に出した繁殖和牛の野生味あふれる，粗食に耐えうる能力．乳を出す牛と，肉に蓄える牛と，目的や品種の違い，改良の成果で，牛がこんなにも違うものかと実感した．

子牛は元気に母牛から乳を飲み，運動場に出ると走り回っている．くりくりとした黒い目でこちらを見るが，不用意に近づくと，母牛の影に隠れてしまう．母牛に給餌した餌を，母牛の横で一緒に食べる子牛の姿はほほえましく，頼もしい．試験研究をするために，丈夫な牛群を作り，生産効率，免疫性，長期連産性などを鑑みたデータを出していくにはどうしたらよいかと，思い悩む日々である．

7　印象に残り，考え続けている言葉

簡単に私の14年間を紹介したが，その間に，心に留まっている言葉や出来事があるので，紹介する．

(1)「わー，あったかい」

年に一回秋に畜産総合センターの一般開放デー，「畜産フェスタ」というお祭りがある．様々な催しが行われ，肉の試食など大人気である．人気イベントとして，搾乳体験もあり，当時，センター飼養牛の中で穏やかな牛を選び，実際に手搾りを体験してもらった．お子さんよりも，大人が感動している姿が多く見られた．

その中で，私が気になっていたのが，「わー，ミルクって，あったかいんだね！」と，子どもや男性だけではなく，お母さん方も感動していることだ．牛の乳を直接肌で感じた率直な感想なのだろうが，「お子さんを生み育てる時に，母乳をやっていただろうに．なぜ？」と，不思議だった．牛乳とは，スーパーや自宅の冷蔵庫に入っていて冷たいもので，自分の母乳と，乳牛の乳と全く異なる物として考えられているのだろうか？　生産現場と消費者の感覚が，こんなにも離れているならば，それを近づけるためにはどこから始めたらいいのだろうか？と，複雑な思いに駆られた．

(2)「飼っている牛や豚をお肉にするのは，かわいそうじゃないの？」

家保にいる時に，県職員が小学校・中学校に，出前授業に行く「農楽の先生」という事業があり，ある小学校

で「畜産物が食卓にあがるまで」というテーマで話をした．質問タイムに，児童からこの「飼っている牛や豚をお肉にするのは，かわいそうじゃないの？」との質問が出た．「牛や豚をお肉にするためには，と畜場で殺します．だからといって，農家さんが，飼っている家畜達をかわいがっていないわけではありません．病気になったり死んでしまったら悲しいです．お肉をおいしいといって皆さんが食べてくれると嬉しいけれど，残して捨てられてしまったら悲しいです」と，私なりに答えたが，児童達に何も伝わっていないことが，表情から手に取るように分かった．困っている私を援護するかのように，とてもおとなしそうな女子児童が手を挙げて，「おばあちゃんも牛を飼っていました．とてもかわいがっていました．私も牛はかわいいと思いました．でも，皆の血や肉になるためにお肉になってくれるのだから，感謝して食べないといけないと思います」と，一生懸命発言してくれた．担任の先生が，「農家さんが大事に育てた命をいただいているのだから，給食も『いただきます』と感謝して，残さないで食べようね」と，締めくくって授業は終わった．講師である私が児童と先生に答えを教えてもらうこととなり，命を学ぶということと，伝えることの難しさを身をもって理解した．

8　女性獣医師について

愛知県職員の畜産関係獣医師の中で，女性獣医師は約1/4である．独身女性獣医師をはじめ，家庭と仕事を両立しておられる女性獣医師も多数おられるし，育児がある程度落ち着いてから転職・再就職してこられる女性獣医師もおり多様性がある．

なお，県の畜産関係獣医師の職場は，生産性を常に考え，探求・研究を求められ，その結果を関係者へ伝達することが重要であるが，特に女性獣医師における強みは，一般的にコミュニケーション能力が高く，周囲との調整を無難にこなせるところであろう．生産者の中には，「獣医師に対しては，『先生だから』と構えてしまうが，女性獣医師には話しやすい」という方もいる．生産者の何気ない言葉を拾い，周囲や関係者に伝えていく，そんな地道で細やかなコミュニケーションを用い，生み増やす家畜の健康をサポートしていくところに，女性獣医師ならではの強みが発揮されている．

自分よりも大きく力の強い牛や豚相手の仕事なので，力など肉体面では性差を感ずる場面もある．力対力で対抗することはできないので，相手（牛や豚）の力を上手く逃し，無理をせずに周囲に協力を求めることで，対応できるものである．

また，無駄を減らすという発想は，男性より女性の方が得意ではないだろうか．これから私が取り組んでいきたいことは，「絶対に必要なこと」と「やらなくて良いこと」を明確にして，時間と金銭の無駄を減らすことである．疾病予防，治療，飼養管理等様々な技術がある．また，餌，添加剤，薬，機器機材等々，物もたくさんある．なかなか難しいのだろうが，本当に必要な技術と物を見極め，生産者や関係者のコスト削減につなげていきたい．

9　ま　と　め

振り返ってみると，生産現場を訪れる家保と，実際に乳牛と肉牛の飼養管理をしている現場を経験させてもらった．公務員獣医師として，いろいろな職場を経験することにより，幅広い知識を身につけることができる良さを感じている．私の希望を叶え，未熟な私を育ててくれた，理解ある上司に恵まれていたことに，改めて感謝せねばならない．

畜産分野に身を置き，何を仕事の喜びとするかは人それぞれだと思う．私は，家畜が健康であり，しっかり餌を食べ，牛であれば反芻をしている姿やリラックスしてのびのびと寝ている姿を見ることが何より嬉しい．それを損なうようなことが起こらないように予防をして，阻害要因を排除していくことが，県に勤める獣医師としての自分の仕事だと思っている．

今回，14年間の経験を振り返る良い機会を与えてもらったこと，その機会となる場を提供してくれた，日本獣医師会とNDKに感謝したい．